

学生新聞

放送大学
埼玉学習センター
埼玉CSC交流会
学生新聞
編集委員会
〒330-0853
さいたま市大宮区
錦町682-2
TEL.048-650-2611

「正しく怖がる」最終回を聴く 「放射線と放射能」を理解する 「正しく怖がるための知識」とは

立春から2週間あまり、未だ肌寒い2月19日(日)、永澤明客員教授の一般公開講演会が、埼玉学習センターで開催された。内容は「正しく怖がる」シリーズの5回目となる最終回で、題目は「放射線と放射能」である。

永澤客員教授によれば、福島原子力発電所の事故以後、十分な知識がないままに放射線や放射能に関する必要な、あるいは不必要な恐怖感が社会に広がっている。しかし実際には、日常生活においても、周囲には放射線や放射線は数多く存在している。それらの放射線や放射線はビッグバンによって誕生した原子に、宇宙が込めたエネルギーの発露である。

それらに、どのように向き合ったら良いのかを考え、正しく怖がるためには、「正しく怖がる」ための基礎的な知識が必要になる。この講演によって、それらの基礎的な知識を得て欲しいと願っているとの事だ。

講演では、まず、「放射線」と「放射能」の違いが説明された。「放射線」とは「放射線」を出す能力や、その能力を持つ物質の事を指し、一般に「放射性物質」と呼ばれている。一方、「放射線」とは、原子が壊れた時に発する目に見えない電磁波や粒子で、非常に高いエネルギーを持っている。「放射線」

は何かにつづかると、持っているエネルギーを物質に与えるため、高熱が生じ、物質は、その熱によって変化すると説明された。ドルトンによる原子の存在の発見、キュリー夫妻による原子から出ている放射線の発見が説明され、元素の周期表の変遷なども紹介された。現在は、それらの元素を衝突させる事で新たな元素が誕生している。昨年、日本の理化学研究所によって新たに発見された元素が「ニホニウム」と命名された事は記憶に新しい。

人工的に誕生させた元素ではなく、自然界に昔から存在している元素から放射線は放たれている事。しかし、その放射線は時間と共に減る方向にある事。福島原発事故で話題に上った「セシウム」には137と134の2種類があり、セシウム134はすでに半減している事等の説明があった。

また、人間は野菜や果物を食べる事で放射性物質のカリウムを摂取し、毎日体内被曝をしている。セシウムは土の表面に留まり土中には入らず、植物に含まれているカリウムに代わって植物に吸収され易いが、子どもの場合は、体内から約30日で体外に排出されるので、野菜や果物などでカリウムを積極的に摂取するようという注意もあった。

8階講堂を埋め尽くした参加者からは、終了後も熱心な質問が出されていた。(冬木)



春の季節 埼玉学習センター所長 渋谷治美

学生新聞の今号が皆さまの目に触れるころは、春爛漫の季節が目前に迫っていると思います。

3月25日には学位記授与式があり、その翌日には、放送大学の総力を結集して企画実施された「ベーター」第九交響曲演奏会が催されます。

埼玉学習センター所属の学生で卒業になります学部卒業生、修士課程修了生の皆さま、誠にありがとうございます。われらが大学

は何かにつづかると、持っているエネルギーを物質に与えるため、高熱が生じ、物質は、その熱によって変化すると説明された。ドルトンによる原子の存在の発見、キュリー夫妻による原子から出ている放射線の発見が説明され、元素の周期表の変遷なども紹介された。現在は、それらの元素を衝突させる事で新たな元素が誕生している。昨年、日本の理化学研究所によって新たに発見された元素が「ニホニウム」と命名された事は記憶に新しい。

人工的に誕生させた元素ではなく、自然界に昔から存在している元素から放射線は放たれている事。しかし、その放射線は時間と共に減る方向にある事。福島原発事故で話題に上った「セシウム」には137と134の2種類があり、セシウム134はすでに半減している事等の説明があった。

また、人間は野菜や果物を食べる事で放射性物質のカリウムを摂取し、毎日体内被曝をしている。セシウムは土の表面に留まり土中には入らず、植物に含まれているカリウムに代わって植物に吸収され易いが、子どもの場合は、体内から約30日で体外に排出されるので、野菜や果物などでカリウムを積極的に摂取するようという注意もあった。

8階講堂を埋め尽くした参加者からは、終了後も熱心な質問が出されていた。(冬木)

歌の歌詞にも謳われていますように、世界や社会や自然を学ぶことは自分を豊かにしてくれます。また、そこに生涯学習の意義と目標があるといえます。皆さまがこれからの人生を豊かにするために努力を重ねられますように、私も応援させていただきます。

他方4月から私どもの学習センターの仲間に加わってくださいませ。学生の皆さま、ご入学おめでとうございます。また、ご入学おめでとうございます。また、ご入学おめでとうございます。

皆さまの心に宿る学びの種が花開き、果実として実りますように願っております。

「サロンしぶや」とクラシック音楽の魅力
青木惣子

「サロンしぶや」では、『クラシック音楽の魅力』というテーマのもと、1年間をかけて、所長の渋谷先生が様々なクラシック音楽を紹介してくださっています。

このサロンで紹介される曲は、フルオーケストラの交響曲やピアノ曲のようにクラシックとして認知度が高いものだけではなく、歌曲、室内楽、宗教曲、オペラと幅広いです。先生が長年聴いてこられた数々の名演奏のなかから選りすぐりの何枚かのCDを皆で鑑賞し、どう感じたかなどを語り合うひと時です。参加メンバーの中には、とてもクラシックに詳しく先生と議論を交わされる方から、私のように全くの初心者まで、幅広くいます。「この盤より別の指揮者のCDの方が好き」「この作曲家なら、この曲よりあちらの曲の方の世界観が好き」などと、話題が盛り上がることもあります。小学生の時から歌っていたという先生の生歌声を聞かせていただく機会も！オペラの回では、ヨハン・シュトラウス2世の『こうもり』の中の一曲が紹介されたのですが、後にその曲は渋谷先生が歌われたものである事が判り、会場は大いに沸きました。

作曲家の生涯や実情などで、より理解が深まるお話も沢山聞かれます。キリスト教の影響や近代西欧の社会事情を知らなければ、同じ曲を聴いても全然違う曲に聴こえます。例えば、バッハのマタイ受難曲。バッハは教会のオルガニストで、毎週日曜日のミサのための曲を作曲し、次々と

使い捨てにする、といった日常の中から数々の名曲が生まれてきたという事実に驚嘆しました。マタイ受難曲は作曲当時、教会関係者のみが演奏をしていて、演奏者たちの能力不足にバッハは「もう少し演奏が上手ならば…」と嘆いていたそうです。また、シューベルトは、31歳で亡くなる迄に数千曲を作曲し、精力的に音楽活動をする一方、「死と乙女」などのキリスト教教会においてはタブーに触れる題材を取り上げたり、孤独で病がちな人生を嘆きつつも、死の2か月前に3曲のピアノソナタを完成させた等のエピソードを教えてくださいました。そのような背景を知る前と知った後では、曲に向き合う思いも自ずから変わってきます。作曲家たちの人間的な側面に触れ、より身近に音楽を感じる事ができるようになったことは、一生の財産です。

様々な折に、渋谷先生と一つ一つの曲をつなぐ束のようなものが垣間見える時があります。それは「人間への興味」ではないかと感じています。曲や声の美しさ、素晴らしい人間賛歌という側面と、作曲家が曲を作らねばならない動機に潜む人間臭さ。音楽はそれらをつなぐ架け橋になることができるのだという事を、一年かけて教えて頂いた気がします。欺瞞や嘘にすぎない生きていけないのが人間である、というカントの言葉を先生が紹介しておられました。すがりきることができず、不安を感じ、疑い、裏切り、悲しむ—その時の葛藤が音を通して伝わってきます。「表現する」作曲家や演奏者と、「それを受け取る」私たち。受け取る側として、もっとアンテナをのびし、自分の中身を豊かなものにしていきたいと思います。

平成28年度 学位記授与式と 卒業・修了 祝賀パーティー開催

平成28年度学位記授与式、卒業・修了祝賀パーティーが左記のとおり開催されます。

【学位記授与式】
日時 平成29年3月25日
(土) 11時～12時
場所 NHKホール(渋谷)

【卒業・修了祝賀パーティー】
日時 平成29年3月25日
(土) 13時半～15時半
場所 センチュリールーム(ハイアットトリージェンシー東京・地下1階)

南関東7学習センター の特別演奏会 「第九」を歌う

南関東7学習センターによる「第九」特別演奏会が左記のとおり開催されます。

【第九】特別演奏会が左記のとおり開催されます。
日時 平成29年3月26日
(日) 14時～
場所 東京芸術大学
奏楽堂

春の入学者の集い

平成29年度第1学期の入学者の集いは、4月2日(日) 13時30分から埼玉学習センター8階講堂で開催されます。

平成29年度第1学期面接業の空席発表は4月15日(土) 12時。追加登録は4月21日(金)。

卒業・入学おめでとう

埼玉CSC交流会代表 嶋崎洋明

平成29年3月卒業の皆さま、卒業おめでとうございます。

埼玉の学部卒業生155名、大学院生15名。入学の動機は其々の事と思いますが、卒業にはまた一方ならずの感慨を抱かれた事と存じます。卒業までの勉学のご苦労に心から敬意を表し、お祝い申し上げます。今年度の卒業懇親会に埼玉同窓会副会長・鈴木さとみさんのジャズバンド演奏が行われます。埼玉フェスタで2年間、演奏して頂きましたが、今回本番からのお声が掛かりました。連絡が遅れましたが、出席の方は楽しんでください。

平成29年4月ご入学の皆さま、おめでとうございます。

埼玉学習センターへの入学生は、学部と大学院を合わせて3月13日現在、923名。「生涯学習社会」の場と捉える方も、新たな勉学習センターに集い、「サークルおみや」「パソコンサークル」の重ねてお祝い申し上げます。

学生手帳

「江戸東京三大祭」
生来、私はお祭りが大好きで、あちこちに出かけては、その地方のお祭りを観て楽しんで

「深川祭」だとする人、いや浅草の「三社祭」といふ人に分かれる。この浅草と深川のいづれを「江戸東京三大祭」に組み込むのか、完全に意見が分かれる。神輿を担ぐ時の掛け声も浅草の三社祭では「ソイヤ」のほうがりズムが取れて景気よく担げるし、力も入り易いという意見に対し、深川の方は正統派の神輿を担ぐ掛け声は「ソイヤ」ではなくて「わっしょい」なのだと反論する。

深川祭は最も暑さの厳しい8月中旬に開催され、3年に1度の本祭りには120基あまりの町内神輿が勢揃いして、その光景はまさに圧巻らしい。三社祭は神田祭とほぼ同時期の5月中旬に行われ、浅草の住民がこぞって参加する気合の入った勇ましい祭だ。

三社祭と深川祭では、掛け声の違いだけでなく、その担ぎ手たちのスタイルが三社のほうは半纏の下に股引姿が多く、深川の方は半ダコススタイルと違っているのが興味深い。いづれが良いかは、人それぞれ好みの違いであろう。

できることなら、「三大祭」と呼称を限定しないで、どちらもその伝統と独特のスタイルを守り続けてほしいと私は思う。

投稿コーナー

陸前高田市ご出身の埼玉学習センター前所長：菅野峰明先生が、震災前の美しい景観と震災後の市街地の様子、復興の現状を現地の写真と共に語ってくださいました。震災をテーマに描いた日本画2部作を、さいたま市在住の日本画家・石原進氏が、画家としての使命と思い心を込めて描いたと紹介してくださいました。

当日いただいたアンケートの一部を紹介します。

* 中学生にとって非常に心に残る体験になったと思います。まさに生きた授業だと感じました。大変素敵な映像を見せていただきました。

* あれから6年が経過し、震災の記憶も薄れがちな首都圏に住む人間にとって、あの日を再び胸に刻む良い機会を得られたと思います。東北頑張れ、陸前高田頑張れと呼び掛けたいと思いました。埼玉の地から発信されたことが更に感動です。

74名の参会された皆様が、命の尊さ・防災教育・震災復興に思いを一つにした意義深い交流会となりました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

学生主催の交流企画 『3・11を語る・伝える』 福盛田恵子

東日本大震災から6年目を迎えました。ご遺族は、かけがえのない命の尊さに思いを募らせていらっしゃると思います。大きな被害のあった岩手県陸前高田市の復興は、まだまだ道半ばとのことです。

震災復興をテーマに、大震災のあった年(2011年)の4月入学生と共に創り上げたオペレッタ3部作(稲村の火 希望の木 ハナミズキのみち)の制作・発表の様子と、それを支える5S活動(整理・整頓・清掃・清潔・躰)を指導した野畑昭徳氏(放送大学大学院生・中学校教諭)が映像で報告しました。また、中学生が創った布芝居『ハナミズキのみち』を中学生が持ち、学校図書館司書の藤本氏が朗読してくださいました。参会者は布芝居の世界に入り、会場は静まり返りました。

交流会では、絵本『ハナミズキのみち』の作者・浅沼ミキ子氏(陸前高田市から参加)が、絵本に込めた思いや復興の現状を話してくださいました。そして、オペレッタ制作に当たって演出等で協力してくださいました福井克明氏(声楽家)が、自ら曲をつけた『歌・ハナミズキのみち』を独唱してくださいました。



南三陸で 出会った笑顔 佐藤マサ子

昨年の9月末日、あいの曇り空の中、私は東日本大震災が起きた宮城県鮎川港を訪れました。初日は港から船で20分の所にある信仰の島「金山山」にある黄金山神社に向かいました。島では野生のシカが迎えてくれましたが、津波の恐ろしさを感じさせる崩れた岸壁、倒された大木などを目にし、一日も早い復興を祈願しました。

2日目は市内を見学しました。バスの窓から鉄骨むき出しの防災庁舎が見えた時、震災直後のニュース映像が蘇りました。この地域では役場や病院、警察などの重要機関までが津波で流され、甚大な被害があった所でした。現在は盛り土が整然と並べられるなど復興が進んでいますが、まだまだ完全な復興とは言えない現状が穏やかな海と共に広がり、複雑な光景を目の当たりにしました。

しかし、宿泊するホテルに到着すると、出迎えてくれるスタッフの皆様のおもてなしに私の方が元気をもらいました。ロビーには震災当時の写真や、当時寝泊りをしていった町民の方々の寄せ書きが壁一面に広がっていました。その中に、このホテルの女将さんを取り上げた記事があり、とても感動しました。女将さんはこの震災を「千年に一度の災害は、千年に一度の学びの場」と話されていて、多くの町民の方々に

前向きに過ごされた180日間の記録が掲示されていました。先ほどのスタッフの皆様の笑顔の背景にあるものを深く感じました。

3日目には、震災当時不通になっていた三陸鉄道に乗り込みました。たまに隣に座られた女性から「5年前のあの日、地震が起こる前に自分は助かった」という話を伺いました。そして、その女性も「お互いがんばって、また来てくらしよ」と笑顔で電車を降りていかれました。

3日間という短い旅行でしたが、被災の爪痕を目の当たりにして心が痛みました。しかし、そこにはそれを乗り越えた人々の多くの「笑顔」がある事もわかりました。改めて、1日も早い復興を願うと共に、自分自身も毎日「笑顔」で過ごそうと決意してきました。お会いできたすべての人々に感謝します。

施設の名称変更

平成29年度4月から学習センター内の施設名称が左記のとおり変更となります。

- * 物理・工学実験室 ↓ 第6講義室
- * 生物・化学実験室 ↓ 実験室
- * 講堂A ↓ 多目的室

平成28年度第2学期 生涯学習奨励賞 授与式

平成28年度第2学期生涯学習奨励賞の授与式が3月18日(土) 11時から埼玉学習センター8階講堂で開催されました。

《生涯学習奨励賞受賞者》(敬称略)

- ・金剛賞 森川玲子
- ・金賞 吉澤弘子
- ・銀賞 神原敏子
- ・銅賞 小峯哲雄
- ・秦野 努 島方敏子
- 江原啓子 長谷川晶一

俳句(つみ草)

天気図のゆるやかな線春きさす
茂吉忌の一筆の朱の遠磨かな
青墨の滲みふくらむ雨水かな
磐座の岩根しまけり初雲雀
さよならと記す恋文春の雪
柔らかに空を掴める官女雛
荒涼の一語とけたす流水期
畦道にせせらぎの音春祭り
庭先の笹に一盛ふきのたう
亀鳴くやぼる繕ひの昨日今日
日をかづく青き富士の峰雨水かな
(見学歓迎 第2木曜日午後 9階第5講義室)

安代 とく江 光娥 十詩 由美 明美 順 博子 厚子 八重子 功

サークル案内

山崎武昭 長谷川勝 書館

- ★3月24日(金) サークル おおみや 総会 13時より
* 来年度の活動方針・役員体制、決算報告・予算等を審議
- ★3月24日(金) 朗読の会「いころ」 毎月2・3回・金曜日 10時〜15時 or 17時
場所 主に第1講義室 4月7日、21日、28日
- ★3月28日(火) 囲碁専科
- ★3月24(金) 25日(土) 江戸時代の古文書を読む会
研修旅行 栃木県立文庫
- ★3月24日、3月31日 いずれも金曜日 英語倶楽部
- ★毎週木曜の午前・午後 毎週火曜の午前・午後 健康体操研究会
- ★毎週火曜日 10時半〜12時 8F 講堂 熟年会
- ★定例会&勉強会 毎月第2火曜日
- ★3月下旬にお花見 開花状況などで決定
- ★パソコン学習会 第2以外の火曜日
- ★映画鑑賞会 11月1回

銀色の日々 「葉隠」を読む 大西 亮

面接授業の「葉隠」と武士の生を受講するに当たり、予備知識に思いつて手元にあった「へたな人生論より葉隠」(作者、本田有明)という本を読み始めた。

「葉隠」は江戸の中期、佐賀鍋島藩の田代陣基(ツラモト)が質問者となり、先輩の山本常朝(ツネトモ)から話を聞きだし、小山信就(シンジユウ)が書き取ったものである。藩祖直茂(ナオシゲ)公と初代勝茂(カツシゲ)公の教えを七十年かけて整理し、書き残した膨大な書物である。武士道のあるべき姿を示し、お家の安泰を如何に図るべきかが書かれている。

この本の著者、本田有明は経営コンサルタントで、現代の人たちが読んで分り易いように解説している。冒頭の言葉に「武士道とは死ぬ事と見つけたり」はあまり

有名である。太平洋戦争中は「葉隠」がもてはやされた。戦争に勝つために国の犠牲になる気持ちで尊ばれた。また、戦後は一転して見向きもされなくなった。時代の移り変わりで受け止め方が異なる歴史を辿ってきたが、読んでみるとそれほど単純な教えでないことが分かる。戦後七〇年経って最近ようやく「葉隠」が見直されている。その理由は、人は必ず死ぬ、死ぬためには一日一日を懸命に生きなければならぬという教えを学ぼうとする気運が生まれてきたからではないだろうか。

しかし、読み進むと「〇〇するべき……」という教えの羅列が多々、どれもこれももつとすきて、少々退屈になってきた。続けて読むか、途中で止めるかと思いついた時に忠臣蔵の話が出てきた。

忠臣蔵は大石内蔵助を中心にし、四十七人の浪士が事件の一年半後、主君浅野内匠頭の敵(カタキ)吉良上野介を見事討ち取った美談とされているが、常朝は異議

を唱えている。一、吉良上野介を討ち取るのに時間がかかり過ぎている。二、もし老人の吉良が討ち入り前に死んでしまっていたら台無しだった。三、見事討ち取ったとはいっても、全員泉岳寺で切腹するべきだった。裁きを受けての切腹では減点である。など書いてある。単なる批判ではなく一理ある話である。

世は元禄 五代將軍綱吉の時代、関ヶ原の合戦から百年経って、戦の無くなった泰平の時代、ぬるま湯につかった平和な時代である。湯につかった平和な時代である。今から三百年前を想像してみたい。

生類憐れみの令に反発する庶民感情の漂う中、忠臣蔵の事件が起こって幕府の片手落ちの裁きに納得できない庶民は喝采を叫んだ。そのような状況下で「ちよつと待った、私はこう思う」と常朝が言った。

事件後、十年位しか経っていない。命がけの発言であった。このような見方を変えた少数意見なら面白い。読み続けることにした。

常朝は「葉隠」を書き終った

時、「君たちに話したことはお家の安泰を思っただけのことである。決して他言してはならない。世の中に誤解を与え、逆にお家のために悪い影響が生じるかも知れない。書いたものは全て焼き捨てよ」とまで言っている。

ところが意に反し、いつの間にか話は常朝の死後も幾種類にも書き写されて、後世に伝わっている。如何にインパクトが大きかったかが分かる。

面接授業の講師は上野太祐(タイスケ)先生、若手の研究者で声が大きく、ゆっくりめの語り口なるほど納得させる説明は素晴らしい。初日は名調子の講義で満足した。次回の講義を期待していたが、センターの事務局から連絡があり、講師が急病となつて閉講にしますとのこと……。忠臣蔵に辿り着く前の閉講とは少々残念だが、二九年下期に再びチャンスがあると思う。合計三回、あの名調子が聴けると思えば、何か得をした気持ちになった。

荒川良雄さんを偲ぶ 西原 稔

荒川さんに初めてお会いしたのは、第二回フェスタ会場準備作業のお手伝いをしたときです。

近づき難い威厳の様なものがあり、緊張しました。それ以来、その人柄に惹かれ、何か会議があり荒川さんが出席されていて、隣席が空いているときはよく横に座らせていただきました。

荒川さんは、いつも「お！元氣」と応じて迎えてくれ、私にとって荒川さんは「情のある古武士」の様な人でした。何んにかから合掌です。

編集後記

長い間「学生新聞」に「世界遺産」に関する記事を書いて下さった荒川良雄さんが、実は、昨年の10月に鬼籍に入られていた事が判りました。編集委員一同、快復を祈っておりませんが、本当に残念でなりません。ご冥福をお祈りします。(冬)